

【個体数】（表 5.4、図 5.32）

—春季—

- ・712 個体であり、過年度の変動幅（1,339～4,401 個体）を下回った。

—秋季—

- ・3,113 個体であり、過年度の変動幅（577～2,462 個体）の範囲を超過していた。出現の多かった羽アリを含むハチ目（約 1000 個体）を除くと過年度の変動範囲内であった。

【湿重量】（表 5.4、図 5.32）

—春季—

- ・17.1g であり、過年度の変動幅（45.8～76.9g）を下回った。

—秋季—

- ・26.1g であり、過年度の変動幅（11.6～41.8g）の範囲内だった。

—まとめ—

St.1（植栽個所）における個体数・湿重量は、St.3（残地林）と比較すると、各年度で変動はあるものの、概ね同程度又は多く確認されたことから、餌昆虫の発生状況は良好と考えられる。

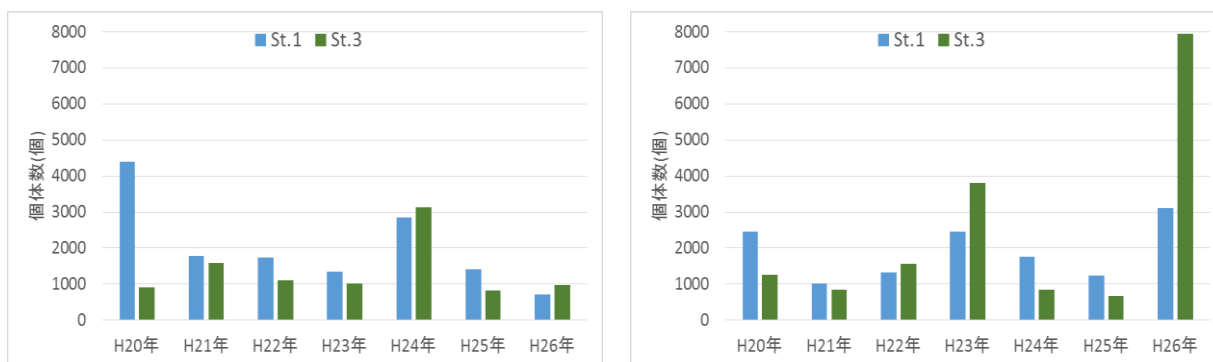


図 5.30 個体数の経年変化（左：春季、右：秋季）

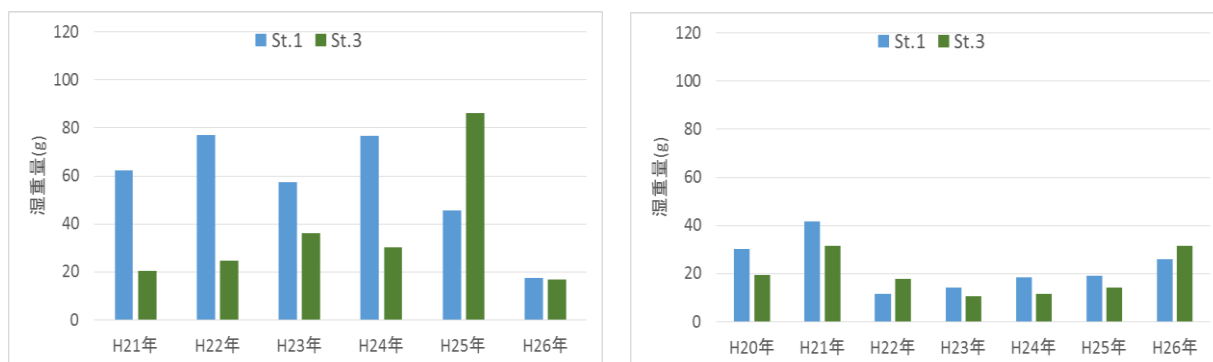
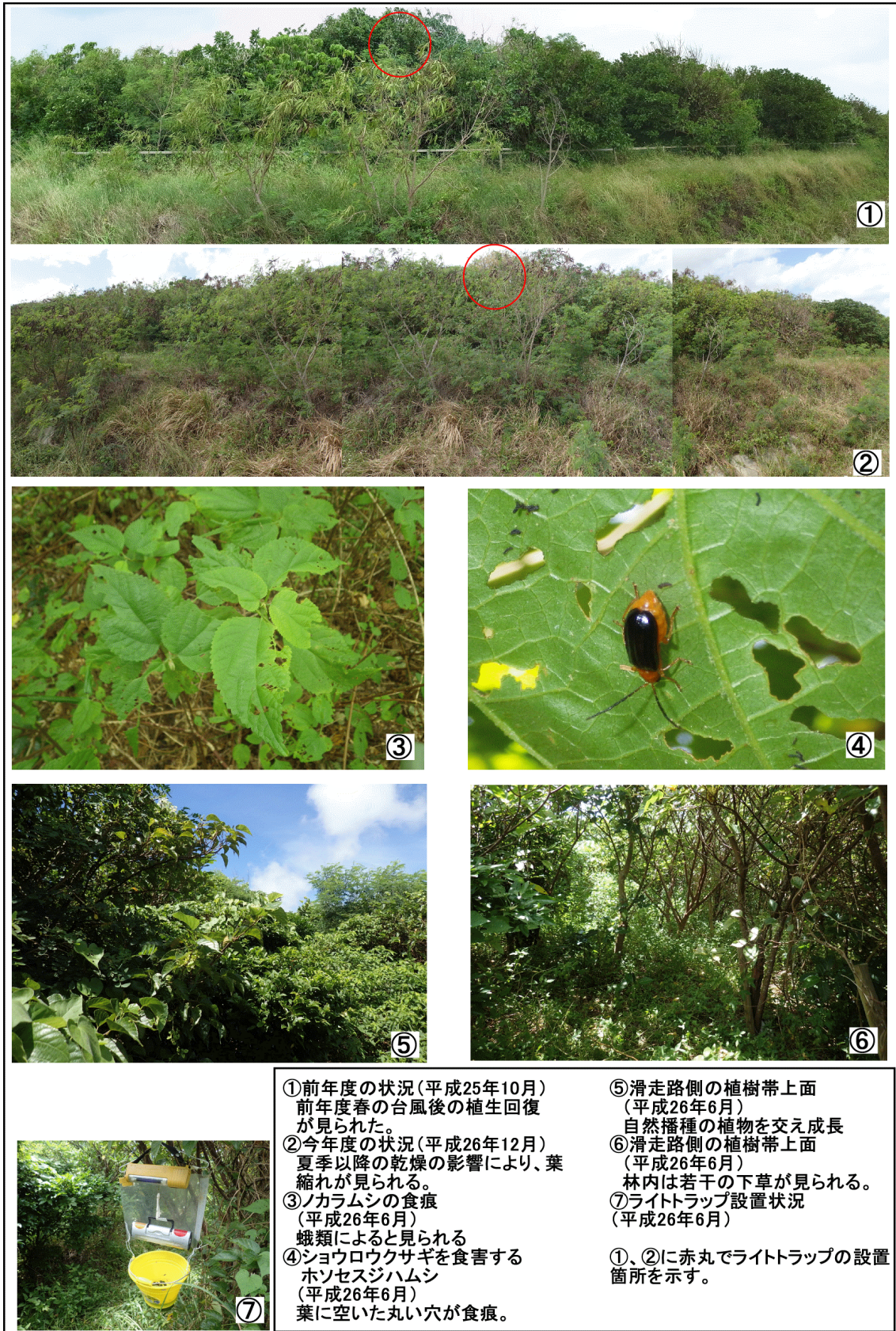


図 5.31 湿重量の経年変化（左：春季、右：秋季）



(4) St.2 (植樹帯)



- ①前年度の状況(平成25年10月)  
前年度春の台風後の植生回復  
が見られた。
  - ②今年度の状況(平成26年12月)  
夏季以降の乾燥の影響により、葉  
縮れが見られる。
  - ③ノカラムシの食痕  
(平成26年6月)  
蛾類によると見られる
  - ④ショウロウクサギを食害する  
ホソセスジハムシ  
(平成26年6月)  
葉に空いた丸い穴が食痕。
  - ⑤滑走路側の植樹帯上面  
(平成26年6月)  
自然播種の植物を交え成長
  - ⑥滑走路側の植樹帯上面  
(平成26年6月)  
林内は若干の下草が見られる。
  - ⑦ライトトラップ設置状況  
(平成26年6月)
- ①、②に赤丸でライトトラップの設置  
箇所を示す。

図 5.33 植生変化の状況 (St. 2)

【個体数】（表 5.5、図 5.36）

—春季—

- ・ 596 個体であり、過年度の変動幅（1,110～3,519 個体）を下回った。

—秋季—

- ・ 3,373 個体であり、過年度の変動幅（295～5,088 個体）の範囲内だった。

【湿重量】（表 5.5、図 5.36）

—春季—

- ・ 37.6g であり、過年度の変動幅（43.9～106.3g）を下回った。

—秋季—

- ・ 18.7g であり、過年度の変動幅（12.2～65.4g）の範囲内だった。

—まとめ—

St.2（植栽個所）における個体数・湿重量は、St.3（残地林）と比較すると、各年で変動はあるものの、概ね同程度又は多く確認されたことから、餌昆虫の発生状況は良好と考えられる。

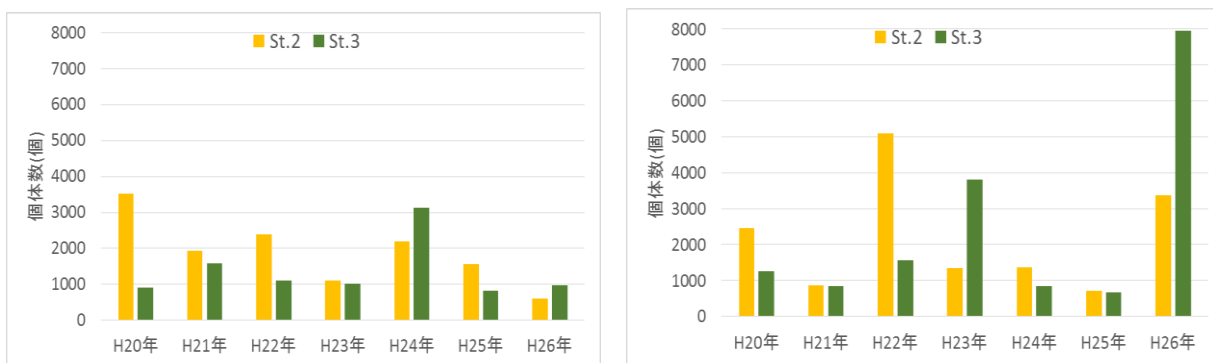


図 5.34 個体数の経年変化（左：春季、右：秋季）

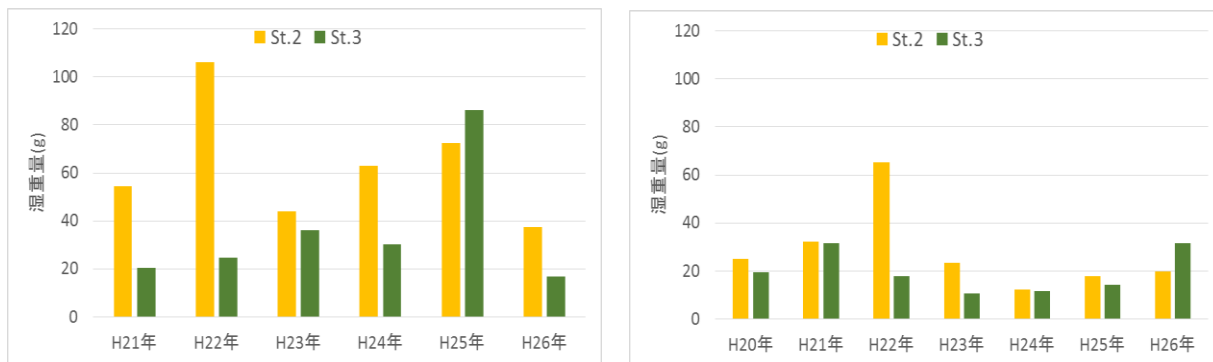


図 5.35 湿重量の経年変化（左：春季、右：秋季）



(ウ) St.3 (残地林)

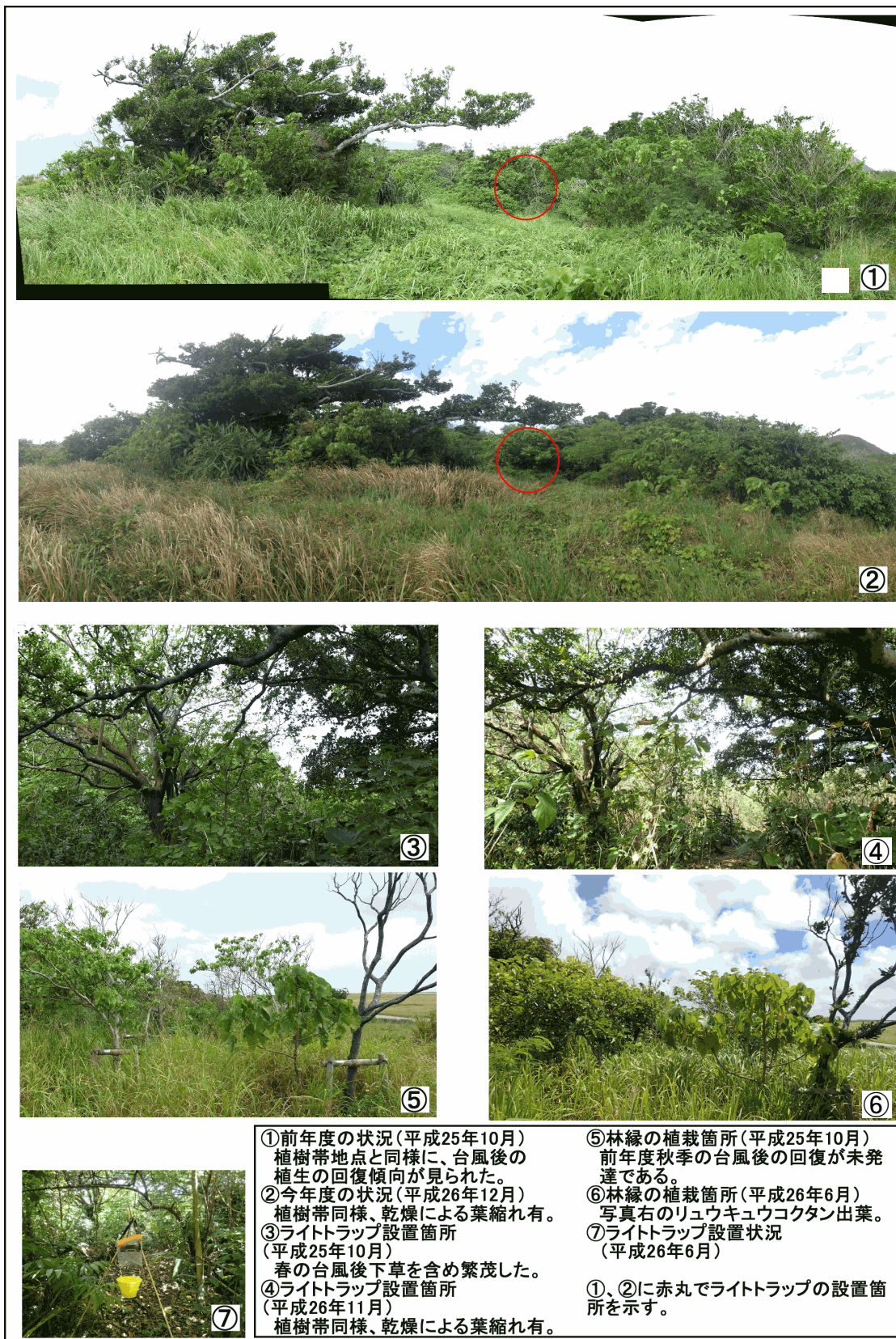


図 5.37 植生変化の状況 (St. 3)

【個体数】(表 5.6、図 5.38)

－春季－

- ・ 972 個体であり、過年度の変動幅 (812～3,128 個体) の範囲内であった。

－秋季－

- ・ 7,958 個体であり、過年度の変動幅 (663～3,814 個体) を大きく上回った。出現の多かった羽アリを含むハチ目(約 5000 個体)を除くと過年度の変動範囲内であった。

【湿重量】(表 5.6、図 5.38)

－春季－

- ・ 16.9g であり、過年度の変動幅 (20.5～86.3g) を下回った。

－秋季－

- ・ 31.7g であり、過年度の変動幅 (10.7～31.7g) の範囲内だった。

－まとめ－

湿重量の推移をみると、春季に少なく、秋季は多い傾向があったものの、概ね過年度の変動範囲内であった。

平成 24 年度の秋季には、台風に伴う被害があったが、これらのコウチュウ目の昆虫は倒木や腐植物に依存する昆虫であったことから、一時的な影響と考えられる。

平成 25 年度は、春季に過年度に比べて増加した。捕獲された昆虫の多くは、カミキリムシやコガネムシ類などのコウチュウ目であった。

平成 26 年度は、秋季で過年度に比べ増加し、コウチュウ目、ハチ目が多く捕獲された。春季と秋季ともに過年度の変動幅と比較して、概ね同程度であった。